

日本の図書館組織における 専門職団体としての矜持とその溶解（前編）

志保田 務

（桃山学院大学名誉教授）

Formation of Japan Library Association and the Other society as Professional Societies and Their Dissolution : Part One

By Tsutomu SHIHOTA

（Emeritus Professor of St. Andrew's University）

抄録

日本の図書館関係団体における専門面に関わる矜持について、その内実と変容に的を据え追究する。

前後編に分け、前編（本稿）では、日本文庫協会その他のわが国図書館関係団体の誕生と、そこにおける専門団体としての矜持の醸成ぶりを把握し、分析、検討する。日本文庫協会が設立（1892年）の16年後に日本図書館協会と改称する（英語名は当二者共 Japan Library Association : JLA）を主対象とする。

JLAは設立以降、自らの独立性、関係領域に関わる支配力を安定しようとする。本稿ではこの営為を矜持と表現する。だが国家権力は、この矜持の育成の奨励を装いつつ實際上規制し、さらにこれを国民の思想誘導の手先としようとする。時代の進行とともにJLAは国家権力への接近を示す。図書館専門団体としての矜持に曇りが浮き彫りとなる。前編は、この昭和初期までを扱う。

後編（次号）では、第二次世界大戦（以下、「戦」と略）時期、JLAの図書館専門団体としての矜持の変質、後発の図書館研究団体、青年図書館員聯盟が示した毅然さと対比、論究する。そして戦末におけるそれら団体の破壊を把握する。この議論は戦後期にも僅かに踏み入る。戦時中の関係言動との断絶、あるいはその継承、さらには戦後の新局面に視線を放ち、批判、小考する。

Abstract

Nihon Bunko Kyokai was formed as a professional society in the Meiji era, and its name was changed into Nihon Toshokan Kyokai (Japan Library Association : JLA) in the Taisho era. This paper discusses the history of JLA's and the other society's pride and self-esteem, and dissolution from the Meiji to the first period of Showa.

目次

- 1 文庫協会の時代：日本文庫協会と関西文庫協会
 - 1 日本文庫協会：1892 年 3 月発足
 - 2 関西文庫協会：1900 年 2 月発足、「東壁」創刊
- 2 日本図書館協会形成期：十五年戦争前まで
 - 1 日本図書館協会誕生と政治的干渉：「松本喜一帝國図書館長」登用と拒絶騒動
 - 2 徳川資金と関東大震災：『図書館雑誌』間宮不二雄委託
 - 3 在京理事会『図書館雑誌』を奪還：「松本喜一理事長」選出
(以後、後編)
- 3 十五年戦争期以降、終戦直後まで：“矜持”の命運
 - 1 青年図書館員聯盟『圖研究』の生長：“事務派”のモラトリアム
 - 2 大政翼賛の JLA の遁走：中央図書館長会議、読書指導
 - 3 矜持の溶解：団体規制令、雑誌休廃刊
- 4 まとめ：民主化転換：断絶と継続

はじめに

日本の全国的な図書館関係職団体の結成とそこにおける矜持の醸成、変容について追究する。前後編に分け、前編（本稿）では、日本文庫協会、その後継としての日本図書館協会に象徴される専門職的団体としての矜持（pride and self-esteem）に当たるところを、その欠如の実態を含め、激動の昭和初期まで辿り検討する。

本稿は、岩猿敏生氏（以下、「岩猿」、すべての人に敬称略）の論文「『図書館雑誌』と『圖研究』」（岩猿；1993）と単行本『日本図書館史概説』（岩猿；2007）に強い刺激を受けた。さらに後編では 2018 年 4 月 29 日『日本図書館学の奔流：岩猿敏生記念論集』（岩猿；2018）記念出版会における祝賀講演「岩猿敏生先生における〈断絶〉と〈継続〉」（志保田務）の趣旨と連携する。

1 文庫協会の時代：日本文庫協会と関西文庫協会

図書館団体の経緯を図るための前提には図書館そのものの存在が必要である。明治初期以前の図書館には公衆の利用を目途とした公共図書館は存在しなかった。日本最初の公共図書館とされるのは、書籍館（Shojakukan, JLA；1994, p.19）である（竹林；1943, p.16）。ただし国立で、現代流の公立図書館ではない。同館は 1872（明治 5）年 4 月 28 日設置された。だが超短期で休止、合併、場所変え、所属換えを重ね、浅草文庫、東京書籍館、東京府書籍館と名称変更したのち、1880（明治 13）年に東京図書館（国立）となる。さらに 1885（明治 18）年、上野に東京教育博物館と組織・敷地を合一した。

国がもたらした上記の変容は如何なる意味あいを示しているか。一言で言えば、国家としての不見識の露呈である。この書籍館（図書館）がなぜ誕生し、流転を重ねたのか、ここでは深部を探る余裕がないため、外見的理由に限って下記に拾いあげておく。各項の主語は日本政府である。

- ① 徳川家の文庫を国に移管し、利用に供する必要に迫られた。

- ② 幕藩資料の国や道府県への移動、受け入れ、保管に関わる記録を作成しなければならず、その書誌的記録の様式の決定を負う専門の機関を必要とした。
- ③ 国立図書館が枢要な文化施設であると欧米の観察から感得し、外国からの訪問者に見せる文化施設を設置する必要を覚えた。
- ④ 教師、学生、勉学志望者の自習・教養施設を設けようとした。(文化的国民融和政策)
- ⑤ 国民教化機関としたかった。(文化的国民弾圧政策)
- ⑥ 土地、建物、資料費、人材など資源が不如意だった。

まず①。資料は旧幕府からの引き取りを主体に漸増した。それらの受け入れ先が必要であり②の問題となる。こうした業務を扱う従事者が要る。和漢書が主体の図書館分野では、他分野並みに“お雇い外国人”重用が効かず、邦人担当者にとっての現実、洋書教材に倣うか『西洋事情』(福澤諭吉; 1866)等の著作から仄聞するしかない。③のように外国からの訪問者に見せる文化施設もない。更に、先進国の仲間入りをするため、教育施設の一環として図書館が必要視された。④である。ここに以上の目的に叶う機軸の図書館と、それを経営・牽引する人材を備えることが急務となった。

こうしたなか 1875 (明治 8) 年に田中不二麿の施した是正策 (書籍館を博覧会事務と分離、文部省所轄へ戻した) は一脈の光明となった。また手島精一の尽力があった。手島は 1870 (明治 3) 年に渡米、ペンシルベニア州ラファイエット大学に留学 (日本図書館文化史研究会, p.182: 同ページでは「ラファット大学」)。だが 1871 (明治 4) 年 7 月の廃藩置県の制で沼津藩からの送金受給の途を絶たれ困窮中だった折り、同年年末から不平等条約改定交渉に來米した岩倉使節団と出会い通訳職に就き、以後、2 年間、欧米視察に随行した。1874 (明治 7) 年帰国。使節団の理事だった田中不二麿の伝手で文部省に入る。更に翌年、文部大輔 (次官) 職の田中不二麿に随行。知見を広め欧米文化通となる。

この手島が 1885 (明治 18) 年、博物館・図書館統合組織の長となり、英米流の文化施設経営を志向する。彼は両部門それぞれに専門の長が必要と考えた。そこで 1886 (明治 19) 年、帝國大学文科大学助教授・田中稲城を、東京図書館・博物館の図書館部担当の一等属 (判任官) 兼務とした。田中稲城は“図書館事項調査” (意見書) を手島に提出。図書館政策改善に関するこの意見書が評価され、1888 (明治 21) 年 2 月、英米留学に至り、図書館関係知識を身に着けた。

同組織は 1889 (明治 22) 年 3 月、官制 (勅令第 21 号) 発布で独立し東京図書館となる。1890 (明治 23) 年帰国した田中稲城は同館長となり、帝國大学教授と同大学同図書館管理 (館長) を兼務した。1893 (明治 26) 年、さらに東京図書館長となり同館組織換えの 1897 (明治 30) 年まで務めあげ、継承組織、帝國図書館の初代館長となった。そして 1921 (大正 10) 年 11 月末まで約 30 年間、その系の館長を勤めた。この間の田中稲城の働きについては、酷評も投げられている (JLA; 1926.12)。

帝國大学は、田中稲城を館長兼務から解き、和田萬吉 (帝國大学文科大学国文科卒) を同館の管理心得に据えた。のちに同館の管理・館長に登用し、東京帝國大学教授を兼任させた。

これら田中不二麿、手島精一、田中稲城、和田萬吉は我が国図書館界の曙光となった。特に後者二人は近代日本図書館知識普及上「第一世代」の代表とされる。ただし、田中稲城は公共図書館を“学生用”と考えている節が強く（石井；1972, p.54）、同世代の佐野友三郎の図書館観と比肩できない。

次に想起されるのは⑤の件である。明治政府は創成期の1872（明治5）年に教部省を設けた。教部省の設置は書籍館の設立と同年である。同省は、神道による国民教化を図り、皇道主義を喧伝し、国民の間に湧き上がっていた自由民権運動の取締りを図った。言論統制のため既に出版条例が1869（明治2）年に発せられ、書籍館設置の翌年1873（明治6）年には新聞紙条目が制定され、言論弾圧が如実となった。書籍館の設置目的、運営方針もその同じ路線にあった。

この間、国立の各種文庫、公立の“新聞縦覧所”、“書籍館”、“図書館”が地方に誕生する。

以上が、図書館専門団体について概要を把握しようとする本文の、前史である。

なお1902（明治34）年創設の関西文庫協会に関する前書き相当の記述は、所定の節1.2で行う。

1.1 日本文庫協会：1892年3月発足

1892（明治25）年3月26日、田中稲城東京図書館長は、国内の文庫・図書館分野における横断的で個人参加の組織の設立を呼びかけた。参加者（36名）には「文庫」と称する官庁、軍部、個人文庫からの人が多かった。そのため、日本「文庫」協会として、米英に次ぎ世界で3番目のLibrary Associationを設立（樋口；1989, p.5）した。専門職団体として不可欠の「会則」を定めた。会名、会員、職員、集会など8章。文中では“図書館”の語を使用（JLA, 1993, 第三部 p.513）した。ただ原初の会則は把握できず、当引用は1906年改正の全29条規定に基づいている。それゆえ関連記事から発足時幹事しかなかった筈の幹部職員構造だが、会則上でそれを確認できていない。

第一条 本会ハ主トシテ図書館ノ事務ニ従事シ又ハ図書館ニ関係アル者ヲ以テ組織シ図書館及ビ図書ニ関スル事項ヲ研究シ総テ本邦に於ケル図書館事業ノ進歩発達ヲ図ルコトヲ目的トス

第二条 前条ノ目的ヲ達スル為ニ本会ハ演説、講話、討議ナドヲ為シ時宜ニ依リ展覽会、講習会等ヲ開キマタハ雑誌報告類ヲ発行スルコトアルベシ（以下、略）

幹事は最初4名、第2期以後は2名となる。この協会結成の切っ掛けは、幕府から引き継いだ膨大な和本・記録類の目録、排列（保管）に難渋していた内閣文庫などの相談に応じること、そのための標準の和漢書目録規則を策定することにあつた。この年、西村竹間筆『図書館管理法』が、目録記入例を示し、1893（明治36）年、太田為三郎が自案の「和漢図書編纂規則」を例会で披露した。なお同規則が公刊されるのは、後述の1900（明治33）年の『図書館管理法』上である。この時期以降の数年間を簡単にたしかめておく。

1894（明治27）年、3年目、8月、日清戦争。「その終結まで休会」とし休眠。

1896（明治 29）年末幹事会再開。協会の存廃議論が出たが継続決定（樋口；1989）。

1897（明治 30）年、立て直しを図る。「図書館従業者合同懇話会」を開き、会長制、機関誌など新事業を検討した。

そこには、関西文庫協会設立と「東壁」創刊という噂、衝撃があった（次節）。

日本文庫協会の本格組織化開始は 1900（明治 33）年 5 月 19 日（第 8 期例会）だが、これが刺激を得たと見られる関西文庫協会に一旦視点を転じる。

1.2 関西文庫協会：1900 年 2 月発足、「東壁」創刊

島文次郎は 1899（明治 32）年、京都帝國大学（以下、「京大」）設立に際し、その初代総長〔予定者〕木下広次の指名で、〔東京〕帝國大学文学研究科大学院生（英文学史専攻）時、京大附属図書館館長就任を受諾した（同年 12 月就任。法学部助教授も兼任）。島が選ばれた理由は、京大設立時に未設の文学部の設置を急ぎ、同学部用の文学関係書を附属図書館蔵書として買い揃えることにあった。そこで島の学識と京都方面で彼の持っている人間関係に期待がかけられた。島は元の姓を野口と言い、父・松陽、兄・寧斎は漢詩人として関西にもこれを知る人が多かった。島は、漢詩「半月集」で有名な湯浅吉郎（エール大学神学博士）を 1901（明治 34）年、京都平安教会牧師から京大法学部講師兼務で同附属図書館に雇用した。湯浅はその 2 年後、シカゴ大学、アルバニー大学に飛んで図書館学を学修。1904（明治 37）年帰国して京都府立図書館初代館長となった。

島は、東京での京都行受任にあたって、東京図書館で経験のある笹岡民次郎を、1897（明治 30）年に京大準備事務局庶務掛に着任せしめ（日本図書館文化史研究会、p.124）、附属図書館の準備を行わせ、さらに 2 年後つまり自らが赴任する 1899 年、秋間玖磨を京大附属図書館に入れた。笹岡、秋間が公共図書館（帝國図書館系）出身であることに留意したい（広庭；1983）。島は彼らと 1900（明治 33）年 1 月 15 日「関西文庫協会」の設立は赴任直後の、1900 年 1 月。設立総会を催し会則を決定、制定。その「関西文庫協会々則」（京都大学；1961）を検討する。

第 1 章 名称

第 1 条 本会ヲ名^マケテ関西文庫協会ト称ス

第 2 章 目的

第 2 条 本会ハ文庫ノ事務ニ従事スル者及図書ニ篤志ノ輩相集リ知識ヲ交換シ文庫ノ管理法 及図書ニ関スル諸般ノ事項ヲ講究シ文庫ノ利用発達ヲ企図スルモノトス

第 3 章 方法機関

第 3 条 第 2 章ノ目的ヲ達センカ為メ本会ハ演説談話討論ヲナシ又雑誌ヲ発刊ス^マヘシ

第 4 条 雑誌ニハ図書館学「ビブリオテクス・ウィセンシヤフト」ニ関スル論説記事及本会報告ヲ掲載シ之ヲ会員ニ頒チ之レヲ世ニ公ニス

第 5 条 本会々員ニ非ラスト雖文庫管理ノ方法其他図書ニ関スル意見ヲ有スルモノハ客員トシテ演説ヲ請ヒ或ハ其寄稿ヲ本会雑誌ニ登録スルコトアル^マヘシ

第4章 会員

第6条 凡ソ図書取扱ニ従事スル者及図書ニ篤志ノ輩ハ何人ヲ問ハス本会々員タルコトヲ得

第7条 本会ニ於テ入会ヲ許諾シタルトキハ会員証ヲ交付スベシ

第8条 会員ハ会費トシテ毎年金壹円貳拾銭ヲ納ムヘシ但一時ニ完納スルモ妨ゲナシ

第9条 世ノ^{ママ}学術家名望家ニシテ本会ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請フテ本会名誉会員ト為スコトアルヘシ但出席会員4分3以上ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

会員の中心である島文次郎は京大図書館長，その仲間の湯浅吉郎は京都府立図書館長であり，帝國図書館，図書館令，など“図書館”との用語が当時も一般的だったが，あえて“文庫協会”と名乗った。日本文庫協会に対抗した面もあるが，第6条に「凡ソ図書取扱ニ従事スル者及図書ニ篤志ノ輩ハ何人ヲ問ハス本会々員タルコトヲ得」と決め“図書館員”を原則としていない。したがって図書館の専門職団体と断言できない。しかし，第3条に「雑誌を発行すべし」とし，第4条には「雑誌ニハ図書館学（ビブリオテックス・ウィセンシヤフト）ニ関スル論説記事及本会報告ヲ掲載シ」としている。それゆえ，この“雑誌”は図書館学の専門誌を目指しており，その執筆者，編集者一団は図書館学専門集団を形成する可能性があった。前出，在京の田中稻城・手島精一・和田萬吉らが名誉会員となり，後述の佐野友三郎が3か月後入会している。これに京大附属図書館の島，秋間・笹岡両館員（以上，発起人），京都府立の湯浅を重ねるだけでも，立派に図書館（文庫）専門職の体を備えていた。また“雑誌”が翌1901年4月『東壁』と銘打って発行された。この発刊は『図書館雑誌』の発行年月1907年10月より6年以上早期である。年3号刊行を予定した。広告も掲載し，近代誌の装いをした。だが図書館学プロパーの論文の掲載を見ない間に経費的に行き詰まり，第3号より次号（4号：最終号）までは会員の一人・村上勘兵衛にその発行元を移した。年会費1円20銭が高額だったのかもしれない。また，編集委員の一人，湯浅吉郎のシカゴ大学留学がもたらした離京（上述）が島文次郎の情熱を冷やしてしまったのかも知れない（広庭；1961）。

関西文庫協会の会合は会議録にて第14回，1903（明治36）年6月27日まで確認される。だが以後の始末は判明していない（岩猿；1957，p.227）。島は，その後も1910（明治43）年まで京大附属図書館長を務め，1906（明治39）年に設置された同大学文科大学（文学部）教授としては1921（大正10）年で在籍した。更に1943（昭和18）年まで同大学講師を務め，1945（昭和20）年に亡くなっている（日本図書館文化史研究会；2017，p.137）。

その間，関西文庫協会は，島文次郎の胸にどのように去来したのだろうか。

関西文庫協会は，専門職団体というよりも「文庫ノ利用発達ヲ企図スル」（同協会会則第1条）緩やかな図書館愛好者サロンだったと捉えられる。ここに同協会の消散の実情が見られる。

2 日本図書館協会形成期：十五年戦争前まで

官制改正（1897：明治30年）による改称で帝國図書館の初代館長となった田中稻城は，1899（明治32）年制定の勅令「図書館令」の内実形成に，内務大臣（当時）小松原英太郎を

助け尽力した。1903（明治6）年、日本文庫協初代会長に就任した（JLA；1993，肖像写真）。

1900（明治32）年、実質 JLA の実力者・田中稲城が執筆した『図書館管理法』に前記の太田案「和漢図書目録編纂規則」を示した。これは和漢書限定だが、本邦初の標準目録規則の公刊と評価される。

ただし同書の責任表示は「文部省編」（文部省；1900）で、同規則が職能団体 JLA の策定との確認を難しくしており、むしろ国と関係業界の同根性を覗わせる姿を呈したといえる。

1903（明治36）年8月、日本文庫協会は「第一回図書館事項講習会」を開き（於・大橋図書館）、修了者37名に受講証明書を出した。講師は、帝國図書館から田中稲城など、東京帝國大学図書館から和田萬吉館長、赤堀又次郎が務めた。わが国最初の司書教育と見られる。

1906（明治39）年3月20-21日、帝國図書館新館落成記念を機に、第一回全国図書館員大会を同館で開催（参加者40名、51名）。翌1907（明治40）年10月17日、日本文庫協会として機関誌『図書館雑誌』を刊行。年3回刊とした。発行拠点と資金を丸善（株）に、編集を同社々員内田魯庵に依存した。これと逆に広告は、丸善のそれさえをも禁じた。そこには便乗根性と、見せかけの潔癖志向（役人根性）が混在した。

同協会は同月19-21日、第二回全国図書館員大会を開いた。その総会において「全国公立図書館中の重なるものに対して国庫補助を仰ぐ件」との提議があった。これに対して京大の附属図書館長・島文次郎が「僅か一千円で文部省に拘束されるな」と発言し、京都府立図書館長・湯浅吉郎らが同調した。国庫補助をえることで国政からの干渉を警戒する専門職団体の矜持堅持の少数意見と、国政異存の姿の JLA 主流の姿の露呈が対比される。（JLA；1993, p.24-25）。

ただし、会則を持ち、研究、講習会、雑誌報告類発行を規定・展開したことで、JLA は、図書館専門職団体性は有したと見てとれる。

2.1 日本図書館協会誕生と政治的干渉：「松本喜一帝國図書館長」登用と拒絶騒動

1) 日本図書館協会へ名称変更：「日本図書館協会規則」策定（1908：明治41年）

1908年、3月、春季総会で上記の改称を決定。この会の規則総則にその目的、矜持を質す。

第一条 本会ハ主トシテ図書館ニ従事シ又ハ図書館ニ関係アル者ヲ以テ組織シ図書館及ビ図書ニ関スル事項ヲ研究シ総テ本邦ニ於ケル図書館事業ノ進歩発達ヲ図ルコトヲ目的トス

第二条 本会ハ前条ノ目的ヲ達スル為メ機関雑誌又ハ報告類ヲ発刊シ時々集会、討議等ヲ成シ時宜ニ依リ展覧会、講習会ヲ開ク

第七条 左ノ二項ニ該当スルモノハ会員タルコトヲ得

- 一 図書館、及ヒ現ニ図書館事務ニ従事セルモノニシテ会員ノ紹介アル者
- 二 評議会ノ詮衡ヲ經テ会長之ヲ認メタル者

前3カ条は、この協会が図書館専門職の団体であることを、最低限度示している。初代会長は市島謙吉・早大館長。この集団について竹林熊彦は「専門家ばかりの集まった団体であった」と記す（竹林熊彦；1958, p.51）。これは一面 JLA 会員の専門性を評価したかのような言

であるが、会員の大半は図書館職とは言っても上級管理者クラス、支配者層だった事実を示している。中小図書館関係者の参会は見られず、図書館的教養・技術を修得しているものは少数で、草の根の図書館運動を起こすような組織ではなく、専門職（技術）集団とは程遠いものであった。

会費は日本文庫協会時の1円から60銭に下げられた。現場クラスに近い会員をも得ようと図った。また館員教育に関して「講習会を開く」と規定し、“機関雑誌の発行”（『図書館雑誌』年3回刊）を規定した。何れも専門職団体として相応しい営為である。だが機関誌刊行では、経費面が弱く、その半額を会員・内田魯案の勤め先丸善に縋ろうとしたことは上述のとおりである。

2) 二十世紀初頭の約20年：佐野友三郎の輝きと、権力側の深淵の狙い

1885（明治18）年12月22日に成立した内閣制度で伊藤博文が初代総理大臣となり、同制度に基づく最初の文部大臣に森有礼が就いた。1889（明治22）年2月11日、大日本帝國憲法が施行された。同憲法下の初代文部大臣職を継続すると擬された森有礼は、この憲法公布の同日、暗殺された。翌年11月29日同憲法施行。同時に帝國議会在開設された。これらに倣って“帝國”を翳し、帝國図書館の官制が1897（明治30）年に成立した。1899（明治32）年、「図書館令」が發布された。法律でなく、規範、許可、手続き中心で実効性が弱い。天皇による勅令（429号）とされた理由は文部、内務など数省にわたる“図書館”の性格にあったかと考えられる。同令は第1条に「北海道府県、市町村（中略）ハ図書館ヲ設置スルコトヲ得」とし、全自治体に図書館建設を勧めた。

秋田県はこれに呼応して、1900（明治33）年、県立図書館の設置を決め、佐野友三郎を館長（代としては2代目）に迎えた。佐野（1864：元治元年生）は1890（明治23）年に帝大國文を中退。免許をとり旧制中学校の英語教師をしたあと台湾で日本総督府の上級事務官を務めた。佐野を秋田県に招いたのは彼の大学時代の友人で秋田県知事（官選）に任じられていた武田千代三郎であった。

佐野は英米の文献から得た知見に基づき巡回文庫を始めるなど、日本の図書館活動に活路を開いた。文部省もこれに着目し文部省年報等を通じて全国に秋田県のこの活動を広報した。1903（明治36）年、佐野は、山口県知事に異動していた武田に乞われて山口県立図書館長（初代）に転じた。翌1904（明治37）年、山口における巡回文庫を開始。また『山口県立図書館 和漢書分類目録』を刊行。さらにデューイ十進分類法（1876年）勸案の“山口図書館分類法”を立案・実用した。翌年『巡回文庫』を刊行。更に図書館に関し多数の著述を発表した。また1909（明治42）年10月、山口県内図書館関係者大会を開催し山口県図書館協会を結成した。1915（大正4）年文部省から派遣され修得した米国図書館事情を縷々講演。その指導は全国に及び、彼における図書館専門職的矜持は燦然と輝いた。

同年11月、前年内務大臣から転じていた文部大臣・小松原英太郎が山口県立図書館を視察した。この視察は、後年「図書館ノ施設ニ関スル訓令」通称・小松原訓令に佐野の所説を獲りこむための“踏み台”であった（図書館用語編集委員会，p.407）。小松原訓令の実際の執筆は

田中稲城が担当した（東條；2005, p.34）。この訓令は全国の地方長官あて出された。

小松原訓令は“通俗図書館”（零細公共図書館）を称揚していた。底で思想善導の機関とすることを画しながら「近代的な教育方法・技術の一環として図書館技術の摂取を図った」とも言われる（石井；1954, p.22）。その翌年 1911（明治 45）年 5 月、政府は通俗教育調査委員会を設け「通俗図書館審査規程」を策定し、簡易図書館やこれを拠点とする青年団に「図書館書籍標準目録」を押し付ける。この時期すでに文部省の図書館行政と、図書館、専門職集団の矜持との間に嵐の予兆があった（石井；1954, p.22）。同年 5 月、大逆事件検挙開始。同事件は小松原が内務大臣の時期に内偵を進めた。8 月、小松原は社会主義文献を取締る内令を全国の図書館長に送った（東條；1999, p.29）。

この期の図書館建設は、日露戦争賠償金、大正天皇即位各記念金の交付などもあり、通俗図書館が伸張する。ただし大半は、資料、施設が貧弱ないわゆる簡易図書館であった。図書館政策は皇室を頂点に、その顕彰のために図書館建設はある種の華やぎを見せる。東京市立図書館の多館化も始まる。

こうしたなか、JLA に重大な変調が生じる。

3) 徳川総裁の慈善と JLA の暗転

JLA 会則は第 4 条に「本会ハ総裁〔元は総理〕一名ヲ推載スル」と定めていた。理事会は 1913（大正 2）年最初の総裁に徳川頼倫を推載した。同氏は南葵文庫長で図書館感覚が豊かで紀州徳川家第 14 代当主で侯爵という地位をみると、氏の就任で JLA が政府関係などで重みを得ようとしたと見られる。彼自身は、再三辞退するなど清廉で、東條文規は頼倫について次のように記した。「有力なスポンサーであり名士である頼倫を総裁に戴くことは、いまだ社会的に軽んじられている図書館を世間や国家に認知させ、しかるべき地位をえるためにも必要だったのである。（中略）図書館に対して国家からの自主性を主張するなどリベラルな姿勢をもっていた」（東條；1999, p.26-27）。また頼倫は 1915（大正 4）年、“図書館概論書”相当の『図書館小識』（今澤慈海著）の出版費全額を提供した。JLA 理事会は同書を全国の首長、議会議長に無料配布し、図書館建設を誘ったが、「名あって実無に等しき」建設に終わり、目論見は当て外れとなった（東條；1999, p.36）。

同年、今澤慈海は東京市立図書館（日比谷：中央館）館長となり、図書館活動に改革を開始した。

この後、館界に大きな動きが生じる。JLA は 1916（大正 5）年 8 月 1～14 日開催の、第 2 回図書館事項講習会の主宰を文部省に委譲したのである。

この委任は、英米における図書館員養成が、協会主導に向かっていた（大城善盛, p.129-131）のと逆である。これが JLA の専門職養成権能の放擲、あるいは国家権力との癒着、その初手だったろう。

1921（大正 10）年、文部省が図書館員教習所開設（学校制度外、中等教育修了者向け 1 年課程）。講義項目等は米国の図書館学校をモデルにしたが（寺田光孝, p.15）、文部省は同所を国民教導の尖兵にしようとしたとの見解も見られる（図書館用語編集委員会, p.403）。ただ同

教習所の初期には秋岡悟郎、加藤宗厚、波多野賢一、弥吉光長（日本図書館文化史研究会；2017）などその後には館界の矜持維持に尽力する修了者をも生んだ。男女共学だった。

同省社会教育課長・乗杉嘉壽はこの教習所の教場を帝國図書館に求めた。だが同館館長田中稲城は“書庫の狹隘”を理由に要求を退けた。これが司書養成事業が館界から外れる第2のモメントであった。教場は東京美術学校に得られた。なおその4年後1925（大正15）年、松本喜一館長時代の帝國図書館内に移動する。そして改称。だが「文部省図書館講習所」と文部省傘下に留まる形を継承した（寺田光孝，p.16-17）。

上記の教場騒動が原因か日本文庫協会初代会長の田中稲城は同1921（大正10年）11月29日帝國図書館長を辞任した。同日付で松本喜一が同館館長事務取扱となる。彼には図書館経験が全くなかった。そこで同省は前年、彼を茨城県師範学校長から東京高等師範学校教授へ異動、省内での格付けを周到に高め、巧みに田中後の帝國図書人事に備えていた。その極みは事務取扱という緩衝職を経由した処置に見える。文部省は確実に帝國図書館を支配するための機会として、田中後人事を利活用した。

JLAはこの期、今澤慈海会長名で「元帝國図書館長田中稲城君後任問題に関する意見」を叩きつけ、松本を館長とすることに反対した（JLA；1993，p.39-40）。だが1922（大正11）年1月、松本喜一は正式に同館館長となった。これが以後四半世紀の帝國図書館に彼の君臨を許す因となった。更にJLAは先の経緯を顧みず、後年彼をその理事長に選出し、後述の十五年戦争期、国策に沿った図書館活動に入る。館界は文部省の翼賛機関化が顕著となる。

上記一連事は「1917年の臨時教育会議以来強化されてきた、図書館を国民に対する教化施設にしようとする文部省の政策の一環である。結果、田中〔稲城〕等の第一世代の図書館人が身に着けていた、アメリカ流の自由で民主的な図書館思想との対立」（東條；2005，p.49-55）に省側が圧勝した。文部省が、図書館界との間の力のバランスを、一挙に官側に傾けた一大象徴事であった。

『米国図書館事情』を金港堂から出した佐野友三郎は、その発行日付2日前の大正9年5月13日に自裁した。長男・佐野文夫の投獄などに悩んだとも言えるが、図書館活動への権力の圧力も無関係でなかろう。

辞世句、「なにごとも、いはで散りけり梨の花」。57歳。

何故彼は卓説した実践を展開し得たか。石井敦は次のように言う（石井；1983，p.44-47）。

第一 確固たる図書館観をもつ。「図書館は成人教育の学校」（『佐野』；1981，p.45）

第二 民衆に全面的な主体、信頼をおいたこと（書架の公開、巡回委文庫、児童図書室）。

第三 Librarianship を有した。「図書をもって人に仕える」が本分（『佐野』同上，p.103）

第四 英米図書館学を正確に咀嚼できた英語力。サービスの詳細や理論も消化吸收した。

彼らに加え、和田萬吉（東京帝大）も館界からの引退を意志表示し、“近代日本の図書館界の第一世代”の指導者達は轡を揃え表舞台から立ち去った。館界に暗雲がたちこめた。

1922（大正11）年、嵐がJLAを襲う。4月、図書館大会への文部省の諮問である。

「図書館をして社会教化の中心たらしむるに適切なる方案如何」との「諮問」である。

(JLA ; 1993)。同年 11 月、政府は天皇の「国民精神作興に関する詔書」を發布した。思想統制の気配が色濃くなっていた。文部省社会教育課長乗松は JLA 評議員となり、JLA への影響力を如実に発揮した。

2.2 徳川資金と関東大震災：『図書館雑誌』 間宮不二雄委託

1923（大正 12）年、徳川頼倫総裁は特別預金 5 万円を拠出し、その利子分年 3 千円の JLA への供与を開始した。この額は JLA の前年までの年間会費総額に相当した。そこでこれを活かす手立てが図られた。この寄付には予告期間もあったから、図書館員養成機関を JLA で堅持する案もあり得た。ただ結果は『図書館雑誌』を月刊誌にすべく動きだした。しかし、人的手当が直ちには進まず、今澤慈海編集責任者の勤務館での部下・竹内善作の孤軍奮闘にまかされていた。

ところが同年 9 月 1 日、関東大震災が勃発する。JLA が編集活動活動本拠を置きかつ雑誌出版経費の半額補助を得ていた丸善（銀座）社屋が壊滅するなど東京を中心とするに被害が勃発しその影響が館界に及んだ。『図書館雑誌』は、月刊化どころか、原稿の受付・編集をする場所さえ失った。徳川頼倫の寄付は、雑誌月刊化の切っ掛けであったが、その月刊化という命題は予期せぬ環境の悪化、人材難の下に逆に焦燥を招いた。月刊化当時の同誌は月平均十ページ代である。

1924（大正 13）年 本誌 172 頁（広告共）別に附録 36、別刷写真 1（本誌平均月 14 頁強）

1925（大正 14）年 本誌 192 頁（広告共）別に附録 52 別刷写真 4、表 1（本誌平均月 16 頁）

1926（大正 15、昭和元）年 10 冊刊行。（本誌平均月 18 頁強）

この嵩は寂しいものであり、『図書館雑誌』の編集を巡って理事会内に波乱が起こる。

大正十五年の初秋今井〔貫一〕氏〔大阪府立図書館長〕から電話で東京から理事の坪谷善四郎氏が来阪して私に面会したいから淀川の某料亭に来て貰えまいかとのことであった。

さてはと予感がした。会った結果は協会誌編集委嘱の件であった（間宮；1960, p.106）

1926（大正 15）年、JLA は前年に引き続き専務理事（姉崎正治）を筆頭責任者としてその年度を始めた。だが 11 月臨時総会を開き理事長職を新設。今井貫一を理事長に選出した。

大阪、間宮への依頼使者となった坪谷善四郎は東京市議、博文館社長、大橋図書館長等を歴任、1919-20 年期には JLA 会長を務めていた。また上記、訪問の時期には新設の専務理事制（姉崎専務理事）の下で理事に戻っていた。元会長、政治家、社長の経験がある坪谷善四郎は大胆に行動する。

周辺事情は更に悪化していた。寄付者の徳川頼倫が 1925（大正 14）年 5 月 19 日に逝去、嗣子・頼貞は寄附停止通告を予告していた。機関誌編集・発行のための繋ぎの体制、資金が必要だった。

ところで間宮不二雄は東京本郷の生まれ育ちで、洋書輸入を主とした書籍、文具・機器商、丸善に勤めたが図書館機器に着目し、その分野が重点の黒澤商会に転職。同社社長の計らいで訪米修行に 1 年程出かけ、帰国後 図書館機器商として独立。大阪市内で開業していた。その

一方間宮は、英語力を活かし図書館関係の翻訳、出版を重ねていた。更に図書館研究誌『圖』の既刊があり、間宮の図書館領域の実力は自他ともに認める奈辺にあった。加えて間宮の活動拠点・大阪市は日本第2の大都市、しかも今井新理事長の勤務地であり、大被災の東京からの避難先として最適候補だったろう。

間宮は上述の JLA 坪谷理事の、「編集依頼」の受諾を決めた（間宮；1960, p.108）

私としては非常に当惑したのであったがわが図書館事業のため大乘的見地から〔自分が仕掛けた〕『圖』誌は一号で廃刊し、図書館雑誌の編集を大正十五〔1926〕年十一月（第八六号）から引受けることにした。

JLA は「本部を東京に置く」との会則6条はそのままにして、何故、大阪に在る今井貫一を、理事長の席まで設けて選出したのだろうか。上述の坪谷善四郎理事が下阪した大正15年の初秋。臨時総会直前という時日（前後関係）に留意が必要である。歴的に、坪谷の間宮への打診が先だった。JLA 本部は、決め打ちで、この一連の手を打ったと思われる。時系列で見る。

- ① 関東大震災発生、大災害：1923（大正12）年9月1日。
- ② 1923（大正12）年12月23日、会則改正：理事職誕生。会長制（当時：太田為三郎）廃止、専務理事制（今澤慈海）。
- ③ 1924（大正13）年1月15日。機関誌を季刊から年10-12回発行に（JLA；1993, p.761）。
- ④ 1925（大正14）年、会則改訂、通常会員年会費3円へ（2円から値上）。徳川総裁基金5万円寄付を披露（樋口；1986, p.25）。
- ⑤ 1926（大正15）年5月19日、徳川頼倫総裁逝去（樋口；1986, p.28）。
- ⑥ 9月24日、理事会「雑誌、会計、事務所の件協議（樋口；1986, p.29）。
- ⑦ 初秋、今井理事（⑧で理事長となる大阪府立図書館館長）を頼り、坪谷善四郎が間宮へ『図書館雑誌』の編集・発行の依頼（間宮；1960, p.106）。
- ⑧ 11月11日会則改訂。（JLA；1993, p.523-524）。

旧16条 理事ハ一切ノ会務ヲ掌理シ本部所在地ノ理事ノ中一名ヲ以テ専務理事トス
新16条 理事ハ一切ノ会務ヲ掌理シ一名ヲ以テ理事長トス〔今井理事長〕

- ⑨ 間宮による正式受諾と発行担当の開始（間宮；1926, 『図書館雑誌』84号挿込）。

この図式だったのだろう。つまり⑥の時点で⑨の筋書きが出来ていたと言うほかない。『図書館雑誌』の“月刊化”を謳った直後、大震災被災。会費を値上げし、総裁の死でその寄付の途絶も心配されたため、編集のための場を持ち、手腕に加え、幾分の経費負担も期待できる間宮に託した。しかし名だけは、自分たち（東京本部）に残したつもりだった。間宮は引受けた号で坪谷の伝えた理事会の意志を了解するむねを最初に記し、JLA 東京本部を「申込所」としたが（間宮；1926）、「會告」には大阪府立図書館と間宮商店の住所を記載しただけで、東京本部は記載していない（JLA；1926. 11）。

JLA 本部は、「今井貫一の監督」の下に間宮不二雄へ編集実務、印刷発送を委嘱したと思っ

ていた（樋口；1986, p.30）。だが創刊したばかりの『圖』誌を廃刊にして捨て身で臨んだ間宮には同分野専門誌編集の専門家たる矜持があった。その内実を考察しよう。

1927（昭和2）年 本誌 387 頁。附録 22。別刷写真 2, 表（本誌平均月 31 頁強）とした。

この平均頁数は、上記、東京で月刊化が発売した3年間で十頁代だったのを5割方凌駕した。頁付けでは通し頁を採用した。索引を付した。新規である。ただし索引編纂の便から主張した横組みは旧勢力の強い抵抗があり実行しなかった。続々寄稿があり JLA 本部との協定より頁数は増大した。

鈴木賢祐（鈴木；1928）は次のように言う。

果たして本誌はその面目を一新した。主たる執筆者は、田中敬、竹林熊彦、鈴木賢祐、加藤宗厚、林靖一、伊木武雄等の諸氏であった。

これらの人は以前の『図書館雑誌』では殆ど記事掲載機会に与っていない。旧期は、機関活動報告類、幹部の随想中心で、研究論文類は精々書誌学のそれだった。間宮は、当時日本の図書館界で有用な領域であった整理技術関係を主体化した。間宮は専門団体構成者のニーズに応えようとした。

一方 JLA 理事会には権力意識があった。前・編集長：今澤慈海は激怒した（今澤, p.25）。

協会雑誌件、先夜結論〔1926 年 9 月 24 日理事会の報告（樋口；1986, p.29）〕ダケヲ聞キ異存モ無之候処。詳細橘井氏〔清五郎：理事の一人〕ヨリ伝承、実ニ意外ニ存候。書店ノ雑誌ヲ流用*（イハバ機関誌ヲ廃シテ）致スコトハ拙生全会員ノ異口同音ニ反対致ス処ト推シ候。此点ニ付キ、其夜老台御反対被下候由、元ヨリ当然スギル事ト存候。コレハ重大問題ニツキ、是非評議員会ニ謀ルベキコト、存候。〔*下線部は今澤原文では圈点。〕

間宮の『圖』を廃刊してまで『図書館雑誌』の救済・改善に捧げた決心を「商売」と今澤は曲解、誹謗した。誌面への評を欠くばかりか、震災被災という、危急を救った善意の者への言たりえない。

1927（昭和2）年には JLA 本部の態度が硬化（次節 2.3 冒頭部参照）。早期の『図書館雑誌』編集権の奪還、編集者・間宮罷免を図る。結果5月号迄で間宮への編集委託が終了する。年半ばである。

間宮はこれを予期していたようである。罷免の前年 1927（昭和2）年 11 月 15 日、間宮は別組織、青年図書館員聯盟を立ち上げ、自ら主催者たる書記長に座った。さらに翌年つまり JLA から編集罷免処置を被る 1928（昭和3）年の1月に、青年図書館員連盟機関誌『圖研究』を創刊していた。自身と心ある図書館員が、専門職の矜持を守る場を再構築したのである。その活動は後編に記す。

2.3 在京理事会『図書館雑誌』を奪還：「松本喜一理事長」選出

1928（昭和3）年 4 月 15 日の総会で今井に代わり松本（松本, p.142）が理事長となる。

JLA 総会はいかつて自ら拒絶した人物・松本喜一を組織の最高権力者・理事長に選んだ。次いで5月4日「在京理事会」が開かれ、庶務・松本、会計・今澤、雑誌・太田と担当が決ま

る。『図書館雑誌』は間宮から取り上げられ、東京「本部」に戻る（間宮；1928）。その通知には確な説明を欠いている（太田，p.140）。「本部」にあたるのは在京理事会である。

この雑誌の本部奪還を有効化するためにも、「財政」が最大の課題だった。徳川頼倫の年3000円の寄付（基金5万円の利子）は、その嗣子、頼貞から打ち切りが予告されていた。松本と太田は新資金の出どころを寄付に探った（長坂；2017）。しかし寄付は進まなかった。寄付権能力なき社団であったJLAの社団法人化が画された。寄付金制度が採用でき、収益事業ができる。申請が認可された。切替期の一年間松本は一旦理事長から退くが、法人化が実現した1931（昭和6）年、理事長の座に復帰した。

なお1932年（昭和7）年、徳川頼貞相手に「特別預金5万円の返還，未払い利子の支払い請求訴訟を東京地裁に提出するが，成果を得ず1940年1月にその訴訟を取り下げた（JLA；1993，p.764，768）。

社団法人化で国の助力を得たJLAは、戦時体制（十五年戦争期間）に入り、読書運動が御用化，全国図書館大会などの催しの大政翼賛化を体現した。JLAは松本喜一の下，不毛の時代へ邁進した。

ただし，青年図書館員聯盟の『團研究』を中心に，少なからぬ図書館員たちの間に図書館専門職としての矜持が残り，それが戦中を生き抜き，戦後に繋がる命脈を保つこととなる。

（以下後編）

参考文献；ABC 綴り，和文の順。各別，著者 50 音。次に年月順。（引用指示と連携）

JLA 1926. 11 [筆者＝間宮不二雄？]「會告」（“本誌の發行を當分の間大阪間宮商店”に委託致し候に就いては第84号以下は本會理事長・大阪府立圖書館長・今井貫一氏編輯監督の下に同店より發行可仕候間此段謹告候也）（『図書館雑誌』85号，p.2）

JLA 1926. 12 [筆者不詳；今井貫一？]「回顧と展望」（“尚數十年間中絶のあり様にて，何等の改良も為さず一國文化の醜模範とさへ極言せられたる，我唯一の國立圖書館も相當なる費用を投ぜらるゝ事となれり”）（『図書館雑誌』84号，p.6）[“極言せられたる”の引用原不詳]

JLA 1928. 6 [筆者不詳；太田為三郎？]「編輯者の変更について」『図書館雑誌』22年6号，p.104

JLA 1993. 12『近代日本図書館の歩み，本編；日本図書館協会創立百年記念』，xx，818 p.

JLA 1994, *Librarianship in Japan*, rev. ed., Japan Library Association, p.19.『有山崧著作集』1970. 3 日本図書館協会，3冊

石井敦 1954. 11『1910年の転機－小松原文相の『訓令』をめぐって－』（『図書館学会年報』vol.1，p.7-22）

石井敦 1972. 2『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会，355 p.

石井敦 1983. 6「民衆へのサービスに徹した人；佐野友三郎」（石井敦編『図書館を育てた人々；日本編，1』日本図書館協会，p.39-47）

石山洋 2015. 3『源流から辿る近代図書館；日本図書館史話』日外アソシエーツ，264 p.

今澤慈海 1926. 10『和田万吉博士宛書翰集（抄）』第二；今澤慈海氏より和田万吉氏への書翰（2）（日本図書館協会百年史・資料・第3輯，1987，p.25）

岩猿敏生 1957. 6『『東壁』日本最初の図書館雑誌』（『図書館界』45(4)，p.344-351）

岩猿敏生 1993. 10『『團研究』と『図書館雑誌』（『図書館雑誌』51(6)，p.226-227）

岩猿敏生 2007. 7『日本図書館史概説』日外アソシエーツ，248 p.

岩猿敏生 2018. 3『日本図書館学の奔流；岩猿敏生著作集』日本図書館研究会，362 p.

大城善盛 1999. 3 “c 欧米”（「1.9.1 図書館情報学教育；歴史と現状（図書館情報学ハンドブック）」

- 第2版, 丸善, 1145 p.) p.129-131)
- 太田為三郎 1928. 6「編輯者変更について」(『図書館雑誌』第22年6号, p.140;「編輯兼発行者」)
- 小川徹, 山口源治郎 2003. 8『図書館史, 近代日本篇』教育史料出版会, p.230(新編 図書館学教育史料集成; 7)
- 小谷誠一郎 1941. 12「図書館雑誌沿革概史」(『図書館雑誌』35年12号, p.29-38)
- 関西文脈の会 2012. 7「小松原訓令 全文」(国立国会図書館デジタル化史料 官報) 1910年02月26日) <http://toshokanshi-w.blogspot.com/> (最終確認日 2018年7月10日)
- 京都大学 1961. 3『京都大学附属図書館六十年史』第6章; 図書館研究団体および協議会との関係。
<https://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/60his/MOKUJI.html> (最終確認日 2018年7月10日)
- 『佐野友三郎』1981(石井敦編『個人別図書館論選集』)日本図書館協会, 330 p.
- 鈴木賢祐 1928. 5「図書館業界の志士[間宮不二雄]」(『図書館雑誌』22年5号, p.115-116)
- 青図連(青年図書館員聯盟) 1928. 1『圖研究』第1巻1-4号(季刊)4冊(索引付き)
- 竹内善作 1926. 7「編輯雑誌」(『図書館雑誌』81号, p.15)
- 竹林熊彦 1943. 6『日本文庫史』大雅堂(復刻, 日本図書館協会, 1988) 436, 7 p.
- 竹林熊彦 1958. 7「関西文庫協会; その歴史的意義」(『京都図書館協会十周年記念論集』 p.37-52)
- 寺田光孝 2012. 3「図書館員教習所から90年を振り返って」(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科 [ほか編]『〈図書館学校〉創設90周年記念事業報告書』61 p.) p.12-21.
- 東條文規 1999. 3『図書館の近代; 私論・図書館はこうして大きくなった』ポット出版, 303 p.
- 東條文規 2005. 5「日本の近代化と図書館」(加藤和夫 [ほか]『日本の植民地図書館; アジアにおける日本近代図書館史』社会評論社, p.17-57)
- 東條文規 2006. 1『図書館の政治学』青弓社, 230 p.
- 図書館用語編集委員会編 2004. 4『最新 図書館用語大辞典』柏書房, 643 p.
- 長坂和茂 2017. 1「大正期日本図書館協会に対する総裁徳川頼倫の貢献」(『図書館界』68(5), 304-316)
- 日本図書館文化史研究会, 2017. 9『図書館人物事典』日外アソシエーツ, 440 p.
- 樋口龍太郎 1986. 5『日本図書館協会五十年史事績年表』日本図書館協会, 55 p. (日本図書館協会百年史・資料・第2輯; 1941年同協会が編纂したが未完だったものを組換え印刷, 発行)
- 樋口龍太郎 1989. 3『日本図書館協会五十年史』日本図書館協会, 156 p. (日本図書館協会百年史・資料・第4輯; 1941年同協会が編纂したが未完だったものを組換え印刷発行)
- 広庭基介 1961. 11「図書館運動の先駆者としての島文次郎」(『図書館界』13巻5号, p.129-136)
- 広庭基介 1983. 6「関西文庫協会の創設者; 島文次郎」(石井敦編『図書館を育てた人々; 日本編, 1』日本図書館協会, p.71-82)
- 福澤諭吉 1866『西洋事情』初編. 尚古堂(慶応義塾大学マイクロフィルム; F7A02-21「著作」)
- 松本喜一 1928. 6「就任の辞」(『図書館雑誌』第22年6号, p.142-143)
- 間宮不二雄 1926. 11「図書館協会編纂 図書館雑誌の発行を引受けるに就いて; 附『圖』誌一時休刊の申譯」(『図書館雑誌』84号, [挿み込み])
- 間宮不二雄 1928. 5「本誌の編輯を辞するに臨みて」(『図書館雑誌』22年5号, p.104)
- 間宮不二雄 1960. 6「一編纂者としての思い出」(『図書館と人生』同氏古稀記念会, p.106-108)
- 文部省編 1900『図書館管理法』金港堂書籍, 132 p.